埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

高知県伊豆田神社付近の方言の複合動詞アクセント

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): 日本語諸方言, 高知県, 幡多, アクセント, 複合動詞 キーワード (En): Japanese dialects, Kochi Prefecture, Hata, accent, compound verbs 作成者: 高山, 林太郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000053

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

高知県伊豆田神社付近の方言の複合動詞アクセント

Accent of Compound Verbs in Some Dialects
Near to Izuta Shrine, Kochi Prefecture

高　山　林太郎
TAKAYAMA, Rintaro

本稿は高知市方言と高知県伊豆田神社付近の２つの方言のアクセントを調査し、中輪東京式諸方言における複合動詞のアクセントの最古態（前部要素の核が複合動詞の核でもある）を示す新証拠を提示する。

１．はじめに―調査方法、分析方法、先行研究

本稿の主たる先行研究は高山（2018d, 2019）である。本稿の目的は、高知県方言話者３名：高知市出身在住者の下原瑞惠氏（1946年生れ女性、記号「瑞」；中央式古態）、幡多郡三原村成山出身在住者の池上博光氏（1947年生れ男性、記号「博」；中輪東京式古態）、土佐清水市下ノ加江市野々（いちのの）出身三原村皆尾在住者の新谷己久氏（1937年生れ女性、記号「己」；市野式＝中輪東京式古態亜種；本稿の範囲内では中輪東京式古態に等しく、中輪東京式古態との違いは３拍名詞７b類のアクセントだけである）を対象に（いずれも姓名の公開に同意を得ている）、複合動詞のアクセント調査を実施し（対面による録音された調査票調査の時期：2018年８月まで）、アクセント体系やアクセント対応を示し、中輪東京式またはそれに準じる方言における複合動詞のアクセントの最古態の新証拠を示すことである。

アクセント表記は上野（2006, p.２）に則り、引用部分では本稿の表記法に改める。「[」は拍間の上昇（[○○は「高高」)、「]」は拍間の下降（[○] ○は「高低」)、「]]」は拍内での下降（[○○]] は「高降」)、「○」は拍（本稿ではモーラに等しい）を指す。東京方言など中輪東京式やそれに準じる方言の丸付数字（⓪、①、②、…）は数字が０なら無核、１以上なら語頭からnモーラ目に下げ核があることを表す。「○]」または「○]]」の「○」に「下げ核」がある。例えば語頭から数えて２拍目の右側に下がり目があれば②型である。また、京都方言や高知市方言など中央式方言のHは高起式（高く始まる声調）、Lは低起式（低く始まり上昇する声調）を表し、Hn、Lnのnは０なら無核、１以上なら語頭からnモーラ目に下げ核があることを表す。「瑞（高知市）、博（三原村）、己（市野々）」の名詞アクセン

キーワード：日本語諸方言、高知県、幡多、アクセント、複合動詞
Keywords　：Japanese dialects, Kochi Prefecture, Hata, accent, compound verbs.

表１　「瑞（高知市），博（三原村），己（市野々）」の名詞アクセント体系

		１拍	＋が	２拍	＋が	３拍	＋が
瑞	Ｈ０	［血	［血が	［ミズ	［ミズが	［サクラ	［サクラが
	Ｈ１	［葉	［葉］が	［ヤ］マ	［ヤ］マが	［ア］サヒ	［ア］サヒが
	Ｈ２					［アタ］マ	［アタ］マが
	Ｌ０	手［ー	手［が	フ［ネ	フ［ネが	ス［ズメ	ス［ズメが
	Ｌ２			マ［ド	マ［ド］が	ツ［バ］キ	ツ［バ］キが
博己	⓪	［血	［血が	［ミズ	［ミズが	［サクラ	［サクラが
	①	［手］］	［手］が	［マ］ド	［マ］ドが	［ツ］バキ	［ツ］バキが
	②			［ヤマ］］	［ヤマ］が	［アサ］ヒ	［アサ］ヒが
	③					［アタマ］］	［アタマ］が

ト体系を表１に示す。

「中央式、中輪東京式、内輪東京式、外輪式、市野式、類別語彙、３拍名詞７b類」等は日本語諸方言アクセントを比較する為の用語で、本稿では上野（2006）、高山（2018d）における定義で用いている。一連の研究は服部四郎、金田一春彦を経て上野（2006）にまとまっている。概説すると、平安時代末期（院政期）京都方言のアクセント体系が声点資料によって判明し、それを出発点として規則的な音変化で日本語諸方言のアクセント体系が導出されると考えられた。院政期の体系における品詞別の各音調型を類と呼び、それぞれの類に所属語彙（類別語彙）を認めた。その後、本土祖体系は更に複雑だということが判明し、院政期京都方言より更に前の時代に出発点を置き直した。また、琉球祖体系は本土祖体系とは既に異質であり別枠で考える必要があることも分かった。中央式、中輪東京式などの用語は、類別語彙の類の統合の違いを表すものである。例えば２拍名詞の院政期における主要な類は１類から５類まであるが、中央式では２類と３類が統合するのに対し、中輪東京式ではそれに加えて４類と５類も統合している。また、動詞は原則として１類（平板型；院政期は高起式）と２類（起伏型；院政期は低起式）に分かれ（但し３類という少数の例外あり）、多様な方言で対立が残っている。

２．複合動詞のアクセント体系と音韻対応

高山（2017b）は同じ調査票に基づいた日本語諸方言の複合動詞アクセントの研究であるが、その研究の目的は、古くは２単位形（証拠あり）であった複合動詞アクセントが、前部要素寄り１単位形（証拠弱し）を経て、後部要素寄り１単位形（証拠あり）へと変化していく音変化の流れの中で、並列形や強調形として一時的に二山型（ふたやまがた）や前部要素寄り一山型（ひとやまがた）が残る（証拠あり）、「音韻生存」と名付けられた現象（高山2018a, 2020a, 2021, 2022）の実証にある。他方で高山（2017b）の方法論を引き継ぐ本稿の目的は、これまで証拠が弱かった前部要素寄り１単位形アクセントの実証にあり、論点が異なる。本稿のデータによって漸く中輪東京式の複合動詞アクセント史のデータが全て揃うことになる。

ここで用語の解説をする。実際には中輪東京式とは限らないが、ここでは用語の説明の為に中輪東京式（句頭の上昇は東京方言風）

に擬した「作例」（例証形ではないので注意）を用いて理論を説明する。平板型動詞に「拭［く」、起伏型動詞に「［吹］く、［出］す」を採用して「拭き出す、吹き出す」のアクセントを考える。２単位形は「拭［き］.［出］す、［吹］き.［出］す」となる。平板型連用形「拭［き］」の古態は語末核を有し、本稿の「博、己」でも同様である（高山2020b）。前部要素寄り１単位形は「拭［き］出す、［吹］き出す」となる。後部要素のアクセントを失い、前部要素のアクセントだけが活かされるので、「前部要素寄り」と呼ぶ（つまり前部要素の拍に下げ核があるということ）。二山型は「拭［き］出［す、［吹］き［出］す」となる。本来の２単位形や１単位形とは違って要素のアクセントを厳密に反映しているとは限らないものを二山型や一山型と呼ぶ。ここでは「拭［き］出［す」は本来の「［出］す」のアクセントを反映していない。後部要素寄り１単位形は「拭［き出］す、吹［き出す、吹［き出］す」である。なお「×拭［き出す」という型は中輪東京式諸方言に存在しない（高山2017b）。前部要素のアクセントを失い、複合動詞全体について次末核型か無核型かという区別になるので、「後部要素寄り」と呼ぶ（つまり下げ核が有る場合は後部要素の拍に現れるということ）。前部要素寄り一山型は「拭［き］出す、［拭］き出す、［吹］き出す、吹［き］出す」である。ここでは「［拭］き出す、吹［き］出す」は本来の「拭［く、［吹］く」のアクセントを反映していない。アクセント史の詳細や並列形・強調形の説明については後述する。

平板型連用形の核は、テ形・タ形でも一部方言（東京都青梅町、千葉県館山市北条）には残っている事を都竹（1951, p.390, p.410）が指摘しているが、高知県伊豆田神社付近の方言（高山（2018d）の話者４名等）では揺れもなく安定している。高山（2020b, pp.363-364）に「連用形アクセントとテ形・タ形アクセントを比較すると、拍数が少ない場合や促音を含む場合にアクセントが規則的にずれることがあるが、基本的には同じものであると見てよい」とある通り、狭義の連用形（非音便形）とテ形・タ形のアクセントが原則一致する。従って平板型のテ形・タ形・狭義の連用形が安定して有核である状態（例：［拭い］て、［拭い］た、［拭き］はする）が「博、己」では成立している。

前部要素寄り１単位形についての古い指摘は高山（2012, p.318）にまとまっているが、特に重要な廣戸・大原（1952, pp.44-47）は、島根県浜田市・鳥取県八東村に前部要素寄り１単位形が見られ、「このような複合動詞のアクセントの形式は中国全般（出雲附近を除く）にわたって存するだけでなく、中国アクセントに酷似した中部地方の一部や四国の西南部に当る高知県の幡多郡などにも見受けられる」と述べる。「博、己」の地域を「幡多」と呼ぶ。同書の記述では既に後部要素寄り１単位形化が進行しており、この点を以て上記で「証拠弱し」としたが、「博」ではそれがまだほとんど起きておらず、前部要素の核が複合動詞の核を決める関係がほぼ完全に認められ、「己」ではその関係が崩壊しつつある（表２太枠内）。

また、前部要素が１モーラの複合動詞では主として②型をとるが、これは「［煮る、［煮ると］き、［煮た］と］き、［見］る、［見］ると］き、［見た］と］き」のように、平板型も起伏型も規則的な音変化に従って連用形一般（タ形や複合動詞前部要素）が②型になるからである。

表２　2018年８月高知県幡多複合動詞調査：データの分析；出現頻度

話者	「己」の複合動詞の型						「博」の複合動詞の型					
核の有無と位置	①	②	③	④	⓪	計	①	②	③	④	⓪	計
３m語, 前部１m核②		138			10	148	2	145			1	148
４m語, 前部１m核②,①	1	81	179		15	276		150	116		10	276
４m語, 前部２m核②,③	1	218	33			252	2	239	3			244
４m語, 前部２m核①	62	52	10			124	122	8	2			132
５m語, 前部１m核②		44	2	12	6	64		56	1	6	1	64
５m語, 前部２m核②,③	12	307	6	13	2	340	8	307	4	5		324
５m語, 前部２m核①	140	164	4	25	15	348	349	10		5		364
５m語, 前部３m核③,④		17	29	2		48		14	34			48
５m語, 前部３m核②,①	1	110	16	5		132	10	119	3			132
計	217	1131	279	57	48	1732	493	1048	163	16	12	1732

表３　2018年８月高知県幡多複合動詞調査：データの分析；代表的な型とその語例

複合動詞の代表的な	型	その語例
３m語, 前部１m核②	②	［寝る, ［寝た］］, ［寝込］む, ［見］る, ［見た］］, ［見込］む
４m語, 前部１m核②,①	②	［寝る, ［寝た］］, ［寝過］ぎる, ［出］る, ［出た］］, ［出過］ぎる
４m語, 前部２m核②,③	②	［拭く, ［拭い］た, ［拭き］込む
４m語, 前部２m核①	①	［吹］く, ［吹］いた, ［吹］き込む
５m語, 前部１m核②	②	［着る, ［着た］］, ［着は］じめる, ［出］る, ［出た］］, ［出は］じめる
５m語, 前部２m核②,③	②	［言う, ［言う］た, ［言い］過ぎる
５m語, 前部２m核①	①	［有］る, ［有っ］た, ［有］り過ぎる（前部単独「［有］り」）
５m語, 前部３m核③,④	③	［ころげる, ［ころげ］た, ［ころげ］込む
５m語, 前部３m核②,①	②	［まぎれ］る, ［まぎ］れた, ［まぎ］れ込む

複合動詞アクセントの調査方法は高山（2017b）の最新の方法と同じである。表２は表４を整理したものである。表３は表２の分類に合わせた語例を示して表２をイメージし易くしている。表４は調査データを整理したもので、表５にその一部を示す（残りは本紀要の資料紹介に掲載する表１（以下本稿では表８と呼称）に示す）。なお二山型のデータ（後述）についても前部要素に存在するアクセントに基づき１単位形のデータとして表５・表８では掲出しているので注意されたい。

表２から表５までの記号を説明する（表８は表５と同じである）。表２と表４で数えているものは出現度数であるのに対して、表５の調査データは出現したアクセント型そのものであるから、「①」などと丸付き数字で書いているので注意されたい。

表２の網掛け部分は出現度数が相当数に達すると認められるものを表示している。表２の太線で囲った部分は前部要素の核が複合動詞の核を決める関係またはそれに近い状態が認められる部分を示している。

例えば表２の「３m語, 前部１m核②」は「複合動詞は３モーラ語であり、その前部要素は１モーラで②型である」という意味になる。「m」はモーラの略号である。１モーラ語な

表４　2018年８月高知県幡多複合動詞調査：データの分類

全	前部		後部		「己」の複合動詞の型							「博」の複合動詞の型						
m数	m数	型	m数	型	⓪	①	②	③	④	二山	その型	⓪	①	②	③	④	二山	その型
3	1	②	2	⓪	9		31						2	38				
3	1	②	2	①	1		107					1		107				
4	1	①	3	⓪	2			2						1	3			
4	1	②	3	⓪	4	1	30	57				5		47	28			
4	1	②	3	②	9		51	120				5		102	85			
4	2	①	2	⓪		16	6	2					20	4				
4	2	①	2	①		46	46	8					102	4	2		1	①.①
4	2	②	2	⓪			43	9						52				
4	2	②	2	①		1	104	15					2	108	2			
4	2	③	2	⓪			15	5						19	1			
4	2	③	2	①			56	4						60				
5	1	②	4	⓪	4		38	1	9					48	1	3		
5	1	②	4	③	2		6	1	3			1		8		3		
5	2	①	3	⓪	11	68	76	4	9				177	6		1	3	①.②
5	2	①	3	②	4	72	88		16				172	4		4	3	①.②
5	2	②	3	⓪		1	80		3					84	4		2	②.②
5	2	②	3	②	1	6	158	4	7				8	160		4	19	②.②
5	2	③	3	⓪	1	1	28		2					24				
5	2	③	3	②		4	41	2	1					39		1	2	②.②
5	3	①	2	①									8				8	①.①
5	3	②	2	⓪			4							4				
5	3	②	2	①		1	106	16	5	10	②.①		2	115	3		22	②.①
5	3	③	2	⓪			3	5						2	6			
5	3	③	2	①			9	17	2	3	②.①			8	20		1	②.①
5	3	④	2	⓪			3	1						4			1	②.①
5	3	④	2	①			2	6							8			

のに②型であるというのは矛盾ではなく、上述（「[見た]]」）のようにタ形で「タ」の直後に下がり目が来る場合のことを指す。２モーラ語の③型は例えば「[乗った]]」、３モーラ語の④型は例えば「[まわった]]」であり、これらも矛盾ではない。

なお２類（起伏型）動詞「[有] る、[有っ] た、[有] り」のようなケースではタ形でなく狭義の連用形の①型で計上している（高山（2020b）に狭義の連用形のアクセントが記載されている）。全体で見るとタ形で整理するのが合理的なのでそうしているが、２類動詞で促音が関与する場合に一部例外として狭義の連用形を見ている。表２の「４m語, 前部１m核②,①」の不規則な「①」は「複合動詞28番、[干る、[ひ] た、干割れる⓪,③,②」の１語だけで、不規則な理由は非日用語だからと見られる。

表５　2018年８月高知県幡多複合動詞調査：全て１単位形と見なしたデータ；全433語のうち冒頭50語

番号	前m数	後m数	全m数	複合動詞かな	複合動詞漢字	己前ア	己後ア	己全1	己全2	己全3	己全4	博前ア	博後ア	博全1	博全2	博全3	博全4
001	2	2	4	あり＋える	有り＋得る	①	①	③	③	③	③	①	①	③	③	①	①
002	1	3	4	い＋あてる	射＋当てる	②	⓪	②	③	②	③	②	⓪	②	②	②	②
003	1	3	4	い＋すぎる	居＋過ぎる	②	②	⓪	③	③	③	②	②	③	③	②	②
004	1	3	4	い＋とめる	射＋止める	②	⓪	③	③	③	③	②	⓪	③	③	③	③
005	2	2	4	うき＋でる	浮き＋出る	②	①	③	③	②	③	②	①	②	②	②	②
006	1	3	4	き＋がえる	着＋替える	②	⓪	③	③	③	③	②	⓪	②	③	③	③
007	1	3	4	き＋つける	着＋付ける	②	②	③	③	⓪	③	②	②	③	③	③	③
008	1	3	4	し＋あげる	仕＋上げる	②	⓪	③	③	③	③	②	⓪	③	③	③	②
009	1	3	4	し＋いれる	仕＋入れる	②	⓪	③	③	③	③	②	⓪	③	③	③	③
010	1	3	4	し＋かえる	仕＋替える	②	⓪	③	①	③	③	②	⓪	③	③	②	②
011	1	3	4	し＋かける	仕＋掛ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
012	1	3	4	し＋たてる	仕＋立てる	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
013	1	3	4	し＋つける	仕＋付ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
014	1	3	4	し＋むける	仕＋向ける	②	⓪	③	③	③	②	②	⓪	③	③	③	③
015	1	3	4	し＋わける	仕＋分ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
016	2	2	4	つき＋でる	突き＋出る	②	①	③	②	②	②	②	①	②	②	②	②
017	1	3	4	で＋かける	出＋掛ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
018	1	3	4	で＋すぎる	出＋過ぎる	②	②	③	③	③	②	②	②	③	③	②	②
019	1	3	4	に＋しめる	煮＋染める	②	②	⓪	⓪	③	③	②	②	③	③	③	③
020	1	3	4	に＋たてる	煮＋立てる	②	②	③	⓪	③	③	②	②	③	③	③	③
021	1	3	4	に＋つける	煮＋付ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
022	1	3	4	に＋つめる	煮＋詰める	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
023	2	2	4	ぬけ＋でる	抜け＋出る	②	①	③	③	③	②	②	①	②	②	②	②
024	1	3	4	ね＋すぎる	寝＋過ぎる	②	②	③	③	③	②	②	②	③	③	②	②
025	1	3	4	ね＋ぼける	寝＋惚ける	②	②	③	③	③	③	②	②	⓪	⓪	⓪	⓪
026	2	2	4	はい＋でる	這い＋出る	①	①	①	②	①	①	①	①	①	①	①	①
027	2	2	4	はみ＋でる	食み＋出る	①	①	③	②	①	①	①	①	①	①	①	①
028	1	3	4	ひ＋われる	干＋割れる	①	⓪	⓪	⓪	③	③	①	⓪	③	③	③	②
029	2	2	4	ふき＋でる	吹き＋出る	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①	①
030	1	3	4	み＋あきる	見＋飽きる	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	②	③
031	1	3	4	み＋あげる	見＋上げる	②	⓪	③	③	③	③	②	⓪	③	③	③	③
032	1	3	4	み＋かける	見＋掛ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
033	1	3	4	み＋かねる	見＋兼ねる	②	⓪	③	③	③	③	②	②	⓪	③	②	③
034	1	3	4	み＋さげる	見＋下げる	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
035	1	3	4	み＋すてる	見＋捨てる	②	⓪	③	③	③	③	②	⓪	②	②	③	②
036	1	3	4	み＋つける	見＋付ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
037	1	3	4	み＋つめる	見＋詰める	②	②	③	③	③	③	②	②	③	②	③	③
038	1	3	4	み＋なれる	見＋慣れる	②	②	③	③	③	③	②	②	②	③	②	②
039	1	3	4	み＋わける	見＋分ける	②	②	③	③	③	③	②	②	③	③	③	③
040	2	2	4	わき＋でる	湧き＋出る	②	①	②	②	②	②	②	①	②	②	②	②
041	2	3	5	あげ＋かける	上げ＋掛ける	②	②	④	②	②	②	②	②	②	②	②	②
042	2	3	5	あて＋はめる	当て＋嵌める	②	⓪	②	②	②	②	②	⓪	②	②	②	②
043	2	3	5	あみ＋おえる	編み＋終える	①	②	④	①	④	①	①	⓪	①	①	①	①
044	2	3	5	あり＋すぎる	有り＋過ぎる	①	②	④	①	②	②	①	②	①	①	①	①
045	1	4	5	い＋あわせる	居＋合わせる	②	③	④	③	②	②	②	③	②	④	④	④
046	2	3	5	いい＋あてる	言い＋当てる	②	⓪	②	②	②	②	②	⓪	②	②	②	②
047	2	3	5	いい＋かえる	言い＋換える	②	⓪	②	②	②	②	②	⓪	②	②	②	②
048	2	3	5	いい＋すぎる	言い＋過ぎる	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②	②
049	2	3	5	いき＋のびる	生き＋延びる	①	②	④	②	②	①	①	②	①	①	①	①
050	2	3	5	いれ＋かえる	入れ＋替える	②	⓪	②	②	②	②	②	⓪	②	②	②	②

表４の「全」は複合動詞全体､「前部」は前部要素､「後部」は後部要素である。「二山」は二山型で、「その型」は二山型の型であり、例えば「②.①」は前部要素が②型で後部要素が①型のものを表す。表５の「番号」は複合動詞の通し番号で、高山（2017b）の調査票と同じ項目、同じ順番である。全433項目のうち40項目のみ表５に掲載し、残りは末尾の表８に示す。「前m数、後m数、全m数」は前部要素、後部要素、複合動詞全体のモーラ数を表す。複合動詞は「かな」書きと「漢字」交じりの両方を示す。前部要素と後部要素の間には「+」を挟む。「己前ア」は「己」の前部要素のアクセント､「後」は後部要素､「己全１」は「己」の複合動詞全体のアクセントの調査１回目を表す。高山（2017b）と同様に、１回目と３回目は調査票を往路で、２回目と４回目は調査票を復路で読み上げていただいたデータである。そうすることで、直前の語の発音が直後の語の発音に影響する現象の効果を相殺することができると考えている。

その他の備考を述べる。先ず「己」について述べる。複合動詞340番は｢［く］わえる､［くわえ］る、［く］わえた、［くわ］えた」併用（｢博」も同様）。なお複合動詞340番は前部要素が①型と②型の併用なので、②型の行を分けて番号欄に「同上」と記している（表８）。｢［蹴った］］」が自然で「［けた］］」は不自然（｢博」も同様）。「［じゅくす］る」が自然で｢［じゅく］す」は不自然。「［ほる､［ほった］］」が自然で「［ほうる､［ほうった］］」は不自然。次に「博」について述べる。「［じゅ］くする」が自然で「［じゅ］くす」は不自然。「いだす、交う、籠める」は不自然。

表４に示した「博」の二山型は「［有］り［得］る１（この数値は出現度数で高々４まで）、［起こ］り［得］る１、［攻］め［寄せ］る１、［あ］いし［合］う４、［有］り［あま］る３、［生か］し［切］る３、［うご］き［出］す１、［買い］た［た］く２、［くさ］り［切］る、［くわ］え［込］む２、［こま］り［切］る４、［じゅ］くし［切］る４、［好き］こ［の］む３、［すす］り［泣］く１、［たど］り［着］く１、［突き］さ［さ］る１、［泣き］落［と］す１、［泣き］く［る］う４、［名乗］り［合］う２、［乗り］う［つ］る２、［履き］ふ［る］す２、［跳ね］飛［ば］す、［まか］せ［切］る２、［撒］き［散ら］す１、［焼き］尽［く］す３、［やぶ］り［取］る１、［揺れ］う［ご］く３、［攀］じ［のぼ］る１、［よわ］り［切］る４」であり、「己」の二山型は「［生か］し［切］る１、［くさ］り［切］る１、［こま］り［切］る３、［ころ］げ［込］む１、［しが］み［付］く１、［たお］れ［込］む１、［まか］せ［切］る１、［まぎ］れ［込］む１、［まも］り［抜］く１、［やぶ］り［取］る１、［よわ］り［切］る１」であって、並列かそれに近い意味である場合、もしくは後部要素が複合動詞を強調する意味を持つ場合に二山型が現れている（高山（2017b）の指摘通り）。

高知県伊豆田神社付近の方言においては前部要素が１モーラの語で一斉に②型以上となるが、これは内部境界が規則的な音変化（表６）の歯止めにならなかったことを意味すると考えられる。表６の高知市方言話者は｢瑞」で､「*［着］始める、*［出］始める」という発音は全く許容できないとのことなので、これらだけ推定形･再建形として掲出している（高知県の中央式方言で更に調査すれば例証される可能性はある）。

次に、先行研究である高山（2017b）と比較して筆者の複合動詞アクセント史観を説明

表６　2018年８月高知県幡多複合動詞調査：代表的な語例のアクセント対応

高知市方言（中央式：推定形は*付き）	高知県伊豆田神社付近の方言（ほぼ中輪東京式）
［寝る, ［寝］た, ［寝］込む, 見［る, ［見］た, ［見］込む	［寝る, ［寝た］］, ［寝込］む, ［見］る, ［見た］］, ［見込］む
［寝る, ［寝］た, ［寝］過ぎる, 出［る, ［出］た, ［出］過ぎる	［寝る, ［寝た］］, ［寝過］ぎる, ［出］る, ［出た］］, ［出過］ぎる
［拭く, ［拭］いた, ［拭］き込む	［拭く, ［拭い］た, ［拭き］込む
吹［く, 吹［い］た, 吹［き］込む	［吹］く, ［吹］いた, ［吹］き込む
［着る, ［着］た, *［着］始める, 出［る, ［出］た, *［出］始める	［着る, ［着た］］, ［着は］じめる, ［出］る, ［出た］］, ［出は］じめる
［言う, ［言］うた, ［言］い過ぎる	［言う, ［言う］た, ［言い］過ぎる
有［る, 有っ［た, 有［り］過ぎる（前部単独「有［り」）	［有］る, ［有っ］た, ［有］り過ぎる（前部単独「［有］り」）
［ころげる, ［ころ］げた, ［ころ］げ込む	［ころげる, ［ころげ］た, ［ころげ］込む
［まぎ］れる, ［ま］ぎれた, ［ま］ぎれ込む	［まぎれ］る, ［まぎ］れた, ［まぎ］れ込む

する為に、先ずは以下に高山（2017b, pp. e131-e132）から若干加工して引用する。本稿の用語法と異なる用語が使われている箇所等は読者の便宜の為に本稿の言い回しに改めた（置き換えるに当たって意味の違いが生じないように慎重に吟味している）。

【以下加工･引用部分】石川県白峰方言（加賀・能登中央式、新田（2005）参照）の複合動詞の無標形は原則２単位形であり（※一部で１単位形もある）、古文献の記述とも比較した上で、最古の状態と見られている。その後、中央式（高知市・土佐市・安芸市の方言を含む）から変化した東京式（内輪式・中輪式・外輪式）の方言では、高山（2012）で論じられているように、「前部要素寄り」（前部要素にだけピッチの山がある状態）の「［吹］き出す、拭［き］出す」が無標形である中国地方（尾道市・岡山市を含む）の古層（都竹1951）のような状態へと変化したと考えられ、同様の「前部要素寄り」化は本稿の高知市・土佐市・安芸市のデータにも観察される。２単位形から「前部要素寄り」の型への変化は「後部要素の式または句の消失による１単位形化」（当然、核も同時に消失する）と分析できるが、式や句のイントネーションとしての機能（後述）が働き、並列やとりたて（強調を含む）の対象となる一部の場合には変化が妨げられ、二山型の有標形として残存したと考えられる。

また、高山（2012）で論じられているように、「前部要素寄り」の型から更に無核化・次末核化し（廣戸・大原（1952）の例では無核化が先行するが、方言により順序・間隔が異なる）、「吹［き出す、吹［き出］す、拭［き出］す」のような無核型・次末核型（「後部要素寄り」の型）へと、無標形が語彙拡散的に変化し、東京（東村山市を含む）では変化が完了しつつあると考えられ、他方で下げ核の昇り核への変化などを経て外輪式（盛岡市方言を含む）が成立すると考えられるが、「×拭［き出す」のような無核型は内輪式・中輪式諸方言の読み上げ調査で観察されない（高山2012）。この理由として、前部要素が起伏型なら「前部要素の核・複合動詞の核」の「二重の解釈」を持つが、前部要素が平板型なら共時的には「複合動詞の核」という解釈しかありえず、「前部要素の無核化」の影響を免れるからであると説明した。「前部要素寄り」の型から「後部要素寄り」の型への変化は「前部要素の核と句の喪失による動詞の２型化」

（無核型か有核型（次末核型）かへの変化）と分析できるが、句のイントネーションとしての機能（後述）が働き、とりたて（強調を含む）の対象となる一部の場合には変化が妨げられ、「前部要素寄り」の型の有標形として残存したと考えられる。

以上のように、盛岡市の表出形や東村山市の程度強調兼表出形が「前部要素寄り」の型であること、岡山市や高知県の並列・程度強調形が二山型であることには歴史的経緯があり、いずれは失われる、通時的変化の過渡期に垣間見られる強調形であることが分かる。

【以上加工・引用部分】

上記の加工・引用部分で、指摘すべき点としては、「表出」と「程度強調」を「強調」の下位概念として区別しているが、「強調」においては常に「表出」と「程度強調」ともう一つ「迫真化」（つまり真実であると強調するという側面が強調には存在するということ）が同時に働くので三者を分離することはできないと考えられる。但し、三者のどれかに意味の重点があったりすることはあると考えられる。東京方言の「前部要素寄り」の強調形は単純な「強調」の意味だが、東村山市方言の「前部要素寄り」の強調形では核の位置によって「非常に真剣」（疑似起伏型、例：な［ぐ］り殺す）か「そうでもなく、冗談も可」（疑似平板型、例：な［ぐり］殺す）かが区別されており、これは「迫真化」の有無が異なっているということが指摘できる。いずれにせよ三者は「強調」という大きな括りでまとめてよい。なお、「並列」は「とりたて」（強調を含む）とは別の原理として扱うべきであると考えられる。「とりたて」と「強調」との意味関係の詳細は高山（2017b, pp. e132-e136）を参照された上で、高山（2018b）における「句頭の上昇」の意味論を参照されたい。簡単に説明すると、例えば音調にプロミネンスが加えられる部分というものは話し手が焦点を当てて聞き手に是非伝えたいと思っている情報であり、その意味で「とりたて」られているが、どのような意図で「とりたて」るのかについては様々な可能性があり、「強調」は意図の一種である。

上記の加工・引用部分で「「前部要素寄り」（前部要素にだけピッチの山がある状態）の「［吹］き出す、拭［き］出す」が無標形である中国地方（尾道市・岡山市を含む）の古層（都竹1951）のような状態へと変化したと考えられ」ると述べられているが、この点の確固たる証拠は高知県伊豆田神社付近の方言の複合動詞のアクセントによって初めて提供される。この種のデータの提供が本稿の主要な意義ではあるが、読者の便宜のため筆者の複合動詞アクセント史観および並列形・強調形についての詳しい説明も以下で述べる。研究者によって様々な意見があるかと思われるが、今後の議論の参考になれば幸いである。

以下で複合動詞アクセント史について述べる時は、基本的には古代から中輪東京式への変化を見ることになるが、内輪東京式、外輪式、中央式の複合動詞アクセントについても大枠の議論としては排除しない。議論の中心に中輪東京式を据えるという形である（おおむね表７のような概念になる）。また内輪東京式は中輪東京式と大差ないので、積極的に議論に組み込んでよい。

複合動詞アクセント史において２単位形から前部要素寄り１単位形へと変化した際に、「並列形」（例：揺れ動く）や「強調形（１）」（例：弱り切る）や「その他の強調形」として二山型が音韻生存したと考えられる（例え

表７　中輪東京式（東京方言）における複合動詞アクセント変化の概念
（初めから中輪東京式だった場合の作例）

１類の変化（「拭き出す」を例に）	２類の変化（「吹き出す」を例に）
拭[き].[出]す（２単位・通常）	[吹]き.[出]す（２単位・通常）
拭[き]出す（１単位・通常），拭[き]出[す（二山・強調）	[吹]き出す（１単位・通常），[吹]き[出]す（二山・強調）
拭[き]出す（前部要素寄り・通常）	[吹]き出す（前部要素寄り・通常）
拭[き出]す（次末核型・通常），拭[き]出す（強調）	吹[き出す（無核型・通常），[吹]き出す（強調）
拭[き出]す（次末核型・通常）	吹[き出す（無核型・通常）
拭[き出]す（次末核型・通常）	吹[き出]す（次末核型・通常）

ば本稿の幡多（中輪東京式）のデータや、高山（2017b）の岡山市方言（内輪東京式）のデータを参照されたい）。音韻生存というのは強調されやすい品詞・語種における（一般的な意味での）強調形として実現するものと定義されているが（高山2018a）、ここで言う「並列形」というのは前部要素だけでなく後部要素にも意味の焦点が当たるという点で「強調されやすい語種」に該当し、ここで言う「強調形（１）」というのは後部要素が複合動詞の意味を強調するという点で「強調されやすい語種」に該当する。なおここで言う「語種」は複合動詞という語種の内部を更に細かく区分するものである。「その他の強調形」というのは分類が難しいが複合動詞を単体として見た場合にやはり強調の意味がある場合を指す。岡山市方言のデータを見ると、下記で「強調形（２）」に当たるものは「並列形」に含まれてはいるが、数は多くないので独立した「強調形（２）」をここでは立てていない。

複合動詞アクセント史において前部要素寄り１単位形から後部要素寄り１単位形へと変化した際に、「並列形」（例：揺れ動く）や「強調形（１）」（例：弱り切る）や「強調形（２）」（例：ぶち割る、こき使う）や「その他の強調形」として前部要素寄り一山型が音韻生存したと考えられる（例えば柴田監修，馬瀬・佐藤編（1985）の東京方言（中輪東京式）のデータや高山（2017b）の東京都東村山市方言（中輪東京式）のデータを参照されたい）。ここで言う「並列形」というのは後部要素だけでなく前部要素にも意味の焦点が当たるという点で「強調されやすい語種」に該当し、ここで言う「強調形（１）」というのは後部要素が複合動詞の意味を強調するという点で「強調されやすい語種」に該当し、ここで言う「強調形（２）」というのは前部要素が複合動詞の意味を強調するという点で「強調されやすい語種」に該当する。東村山市方言のデータを見ると、「並列形」や「強調形（１）」の数は大幅に減り、代わりに「強調形（２）」が出現していることが分かる。

また、複合動詞アクセント史を説明するツールとしての「音韻生存」に関する高山（2017b）の指摘の新規性について述べる。従来から例えば東京方言では「[こ] き使う」のような意味的に強調される語彙で前部要素寄り一山型が現れることが指摘されていたので、強調形に古い音韻が現れる例が知られていなかったわけではないが、強調形に古い音韻の残滓が規則的に残っているとまでデータに基づき論じられていたわけではなかった。

最後に、「(a) ２単位形、(b) 前部要素寄り１単位形、(c) 後部要素寄り１単位形」につ

いて、「(a) > (b) > (c)」という順序で変化が起こったという点について補足しておく。これは「(a) > (c) > (b)」という順序もありうるのではないかという疑問に答えるものである。前部要素に着目すると、(a) と (b) では前部要素のアクセントが活かされているので、動詞の類別語彙１類（平板型）と２類（起伏型）の区別（院政期に高起式か低起式か）がそのまま複合動詞の類別語彙にもなっている。ところが(c)では１類から次末核型が生じ(無核型は生じず)、２類から無核型または次末核型が生じる為に、無核型は２類に相当するものの、次末核型は１類と２類の混成になる。次末核型から１類と２類が綺麗に分かれて(b) が成立することは不可能なので、「(c) > (b)」は困難である。なお東京方言古態では「山田の法則」と言って、２類から先ず無核型だけが生じた為に次末核型が一時的に１類のみから成っていた。その場合「(c) > (b)」は語彙グループの観点からは可能に見えるが、アクセント体系は原則として複雑なものから単純なものへと変化して行くので、次末位置以外にも下げ核が位置を持つことができる複雑な体系に特段の理由も無く変化するとは考えにくく、やはり困難である。

なお「山田の法則」について作例を用いて簡単に説明しておく。東京では「[吹] き出す」のような２類から先ず「吹［き出す」のような無核型が先行して生じ、その後に次末核化の変化が起こった為に、「拭［き出］す」のような次末核型は元は「拭［き］出す」のようだった１類からのみ成っていたが、諸方言で見れば次末核化は１類・２類共に起こりうるものであり、無核化と同時に次末核化が起これば、無核型は２類から成り次末核型は１類及び２類から成る状態が直ちに実現し、「山田の法則」は一時的にでも成立しないということになる。

３．おわりに―まとめと今後の課題

高知県伊豆田神社付近の方言が中輪東京式古態を維持していることは名詞・形容詞・動詞・四モーラ畳語について高山（2018d）が指摘している。それを受けて本稿では更に複合動詞の調査も実施して、やはり中輪東京式古態を維持していることを明らかにした。複合動詞で前部要素寄り１単位形で安定しているデータを初めて提供した。今後は福井（2019）に見られる岐阜県内輪東京式方言など、中輪東京式古態や内輪東京式古態を維持している各地の方言で同様のテーマに取り組んで行くことが求められる。

４．記号生存に関する補足―東アジア以外からの例

高山（2017a, 2018c）に続き、高山（2020a）では八丈方言の間投音のデータを示した。強調された音声が強調された記号として世界に根強く分布している、即ち記号生存しているという主旨であった。更に外国人留学生（2018年４月調査時点で平均年齢24.6歳の40名）からの情報を列挙する。回答者達の回答を総合すると、ウズベキスタンでは、唇ブルブルは寒い時や泳ぎに行った時や赤ちゃんと遊ぶ時にやり、舌打ちは怒る時・ダメな時にやり、ねず鳴きは犬猫を呼ぶ時や、忙しい時や困る時に「ちょっと待っておいて」と伝える時にやる。ネパールでは、唇ブルブルは３～５歳を可愛がる為に、あるいは赤ちゃんに対してハッピーな時にやり、舌打ちは面白い･元気･楽しい・嬉しい時に（例えば男が可愛い女を見た時にも）やり、ねず鳴きは犬猫・小鳥な

どの動物を呼んだり餌をやる時にやる。スリランカでは、唇ブルブルは赤ちゃんが可愛い時にやり、舌打ちは嬉しい時にやり、ねず鳴きは犬などを呼ぶ時にやる。バングラデシュでは、舌打ちは嬉しい時にやる。ミャンマーでは、ねず鳴きは犬を呼ぶ時にやる。インドネシアでは、唇ブルブルは赤ちゃんが可愛い時にやり、舌打ちは嬉しい時にやり、ねず鳴きは猫などを呼ぶ時にやる。ベトナムでは、唇ブルブルは赤ちゃんを可愛がる時にやり、舌打ちは怒った時や嬉しい時にやり、ねず鳴きは犬猫や動物を呼んだり餌をあげたりする時にやる。中国では、唇ブルブルは赤ちゃんが可愛い時にやり、舌打ちは怒る時や嬉しい時にやり、ねず鳴きは犬猫などへの餌やりの時にやる。

内容について分析すると、ウズベキスタンは白人のムスリム国家だが、唇ブルブルの意味はドイツと同様であり、白人系の特徴と見られる。唇ブルブルが日本同様赤ちゃんを可愛がるものということは、ウズベキスタンを除く、アジアの広域で共有されている。ねず鳴きが日本同様犬猫などの動物を呼んで餌やりをするものだということは、ウズベキスタンも含めて、アジアの広域で共有されている。舌打ちについては、日本同様怒る時のみがウズベキスタン、嬉しい時のみがネパール・スリランカ・バングラデシュ・インドネシア、怒る時または嬉しい時がベトナム・中国であり、分布が複雑である。なお今回の分析はたった40名のアンケート調査に基づくものであり、改善の余地がある。

参考文献

上野善道（2006）「日本語アクセントの再建」『言語研究』130：1-42.

柴田武監修，馬瀬良雄・佐藤亮一編（1985）『東京語アクセント資料 上巻・下巻』長野：信州大学人文学部馬瀬研究室，東京：国立国語研究所言語変化第１研究室.

高山林太郎（2012）「岡山市方言の複合動詞のアクセント」『東京大学言語学論集（TULIP）』32：305-332. 東京：東京大学言語学研究室.

高山林太郎（2017a）「語用論的意味の持つ多様な分かり易さ」『東京大学言語学論集（TULIP）』38：375-382. 東京：東京大学言語学研究室.

高山林太郎（2017b）「多型の日本語諸方言の複合動詞の有標アクセント」『東京大学言語学論集電子版（eTULIP）』38：e119-e321. 東京：東京大学言語学研究室.

高山林太郎（2018a）『タッスイのッとは何か』高知：リーブル出版.

高山林太郎（2018b）「東京・岡山市・高知市方言の並列・とりたて詞と句頭の上昇」『音声研究』22（１）：1-12. 東京：日本音声学会.

高山林太郎（2018c）「日本列島のふるえ音と吸着音と膨れっ面」『東京大学言語学論集（TULIP）』40：307-324. 東京：東京大学言語学研究室.

高山林太郎（2018d）「高知県伊豆田神社付近の方言のアクセント」『音声研究』22（３）：1-16. 東京：日本音声学会.

高山林太郎（2019）「高知県伊豆田神社付近の方言の複合動詞のアクセント」『第33回日本音声学会全国大会予稿集』80-85. 東京：清泉女子大学，2019年９月29日.

高山林太郎（2020a）「記号生存と認知集合論―古い記号が残る理由―」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』20：1-14. 川口：埼玉学園大学.

高山林太郎（2020b）「高知県伊豆田神社付近の方言の動詞活用形のアクセント資料」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』20：363-368. 川口：埼玉学園大学.

高山林太郎（2021）「記号論から認知集合論へ―記号としての現実―」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』21：1-14. 川口：埼玉学園大学.

高山林太郎（2022）「認知集合論における記号生存

—個体愛の受肉—」『埼玉学園大学紀要人間学部篇』22：1-14. 川口：埼玉学園大学.

都竹通年雄（1951）「動詞の連用形とアクセント」『国語アクセント論叢』383-412. 東京：法政大学出版局.

新田哲夫（2005）『金沢大学フィールド文化学１ 石川県白峰地方の方言特徴と方言テキストの語法』石川：金沢大学文学部.

廣戸惇･大原孝道（1952）『山陰地方のアクセント』島根：報光社.

福井玲（2019）「岐阜県旧益田郡方言のアクセントにおける２拍名詞（０）型と（２）型の区別—明治生まれ話者の録音資料から—」『第33回日本音声学会全国大会予稿集』86-91. 東京：清泉女子大学. 2019年９月29日.